



## 化学会発

# シンポジウム報告“化学が活きる多様なキャリア群像”

## —女性化学者・技術者の夢と現実、将来展望—

男女共同参画推進委員会

3月25日～28日に関西大学千里山キャンパスで開催された日本化学会第87春季年会の第1日目午後には表題のシンポジウムを行った。当委員会の開催する男女共同参画シンポジウムも7回目になる。そこで若手研究者・技術者を直接支援するものとしたと、進路を具体的に考えるロールモデルを提供できるよう、様々な分野で活躍する化学を学んだ方々に、その仕事・経験について語っていただいた。どのように大学で学んだことを生かしたか、意欲的に働き続けるための工夫、どう専門性を高めてきたかなど、男女を問わず学生や若手研究者並びに技術者に聞いてほしい内容の講演が続いた。

以下は、講演者による内容紹介である。

### 共働き子持ち主婦の博士課程への挑戦

女性のライフスタイルを考える上で、「仕事」「結婚」「出産」「子育て」はセットで考えなければならないことである。2000年代に入って、出産しても仕事を続けられる環境は、企業、地域、それぞれに整ってきていると言える。化学を学んだ女性が技術者として、研究や企画、営業に携わっていくことは、私たちが生活する場である衣食住すべての商品に対し、生活者の目で企画、研究、開発するということである。生活者の目で物を見つめる「感性」は、その人の経験値の高さで大きく違うことになり、まさにこの「感性」は「出産」「子育て」を通して磨きがかかり、この「感性」を持つことが、

男性より優位に働く多くの場面を創っていると言える。大学で学んだ化学を含む科学の知識を活きた情報と知恵に変換できる力は、「子育て」にかかわる様々な経験が大いに役立った。子育ての経験による資質の向上は、自身が働く企業のためだけではなく、子育て後の50歳からの自身のライフスタイルにも生きてくる。

(フジテレビ商品研究所 塩原みゆき)

### 時にスペシャリスト、時にゼネラリスト

化学を学んだ後に「科学技術ジャーナリスト」という職業につき、大学・産学連携の取材を手掛けている私は、科学技術を学んだ後にその周辺分野で活躍する人材の急増を実感している。大学、企業と官公庁の橋渡し役である「産学官連携コーディネーター」では、研究者（発明者）の思いも、企業の立場も理解して動ける若手が増えている。また、専門の科学者と一般人を結ぶ「科学技術コミュニケーター」に向けて、サイエンスカフェを運営する社会人、展示に工夫をする科学館職員、効果的な理科教育を担う小中



講演者：左より塩原、山本、西原、小山、加藤



高教員、研究成果が社会でどう扱われるかを学ぶ大学院生などで、スキルアップの試みが広がっている。

こういった分野では、化学者などスペシャリストとしてのI（私）と、機関内外の人と連携するゼネラリストとしてのWe（私と社会）の二つの視点が必要だ。女性は人と人とのコミュニケーションを得意とする人が多いだけに、活躍の潜在力が高いと思っている。

(日刊工業新聞社 山本佳世子)

### 大学院の男女共同参画推進活動と化学の将来

東京大学大学院理学系研究科では、平成14年度に男女共同参画WGが発足し

た。4年間の活動の成果を踏まえて昨年、男女共同参画推進委員会へ格上げされ、同時に推進室が創設された。本年2月に理学系の男女共同参画基本計画が教授会で承認され、いよいよ本格的な推進活動がスタートする。この間、演者は理学系の活動を企画、支援する役割を担った。意識アンケート、パネル討論や懇談会を通して、構成員の年齢、性別、身分（教職員、学生）の違いによる男女共同参画に対する意識の温度差を強く認識し、セクハラ、雇用におけるポジティブアクション、数値目標といった特に男性がナーバスになる課題への対処の難しさを実感した。科学の未来のために、有能な人材が研究や教育を担えなくなる障害を取り除くことには皆賛成であろう。演者は、大学においては現在の学生の男女比がそのまま30年後の教員の男女比になることが理想であり、それを実現するためには、決して焦らず十分な話し合いのもとに構成員の共通認識を作り上げること、長期的な視点での制度や施設、環境の整備を迅速に行うことの両方が不可欠であると思う。

（東京大学 西原寛）

### 理系職場の将来展望、職場環境は自分で拓く

学生時代、有機化学が嫌いで物理化学の研究室に入り就職活動では長く化学にかかわっていける企業で働きたいの思いから、広い分野の研究開発を行い、かつ消費者に密着した化学会社を探した。

縁あって味の素に入社、最初は有機合成をしている研究室に配属されてしまった。そこでは、わからないことを教えてもらったり、素人考えも遠慮なく言って参考にしてもらったり、今思えば新人の開き直りのようだった。3年たって界面活性剤の利用研究をする研究室に異動になった。そこでは界面化学を専攻したことが活かせ、自分が描くものを作る挑戦もさせてもらった。そこで10年以上がたち、仕事に対するワクワク感が薄れてきた。さてどうしようかと迷い、味の素(株)に勤務しているのだからアミノ酸のことをもっと知りたいと考え異動希望を出し、アミノ酸技術室(当時)に異動した。そこで次なる新しいものづくりの準備をしている。仕事をワクワクしながら続けたいという思いを、科学という共通語を通して素直に周りに投げかけることが職場環境を拓くヒントなのかもしれない。

（味の素(株) 小山匡子）

### 化学大好き学生を育てる研究と教育

男女共同参画の推進には実力ある女性研究者の育成は何より重要である。演者は、昨年4月に北海道大学理学研究院に着任した。折しも、所属する化学専攻では、文部科学省の平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに「高邁なる大志を抱いたT型化学者養成」が採択され、大学院教育における様々な新しい取り組みが行われている。女子学生の育成にも積極的である。「女性キャリ

アパス講演会」もその一つで、講演会では、社会で活躍している女性研究者の先輩に自身の経験や研究に対する思いなどを語っていただき、直接対話できる座談会も一緒に行った。先輩の生き様は、身近なロールモデルとして、学生たちを大いに刺激し勇気づけたようである。また、ちょうど平成18年度から、文部科学省科学振興調整費「女性研究者支援モデル育成」の課題も北大の全学的なプロジェクトとして始まり、女子中高生向けイベント等をお手伝いさせていただいた。若い人が夢と希望と生きがいを持って研究者への道を歩み出してくれれば、うれしい限りである。

（北海道大学 加藤昌子）

総合討論では講演の内容に共感する意見が多く、また各自の経験を紹介する聴衆もいて大いに盛り上がった。参加者は記者で男性23名、女性47名の計70名である。記名せず1~2講演だけを聴講する方も多く、実際には100名以上の参加者がいたように思う。会場で集めたアンケートでは、このようなシンポジウムは必要であり、講演が大変参考になったという20~30代の参加者の声が大きく、今後の企画に生かしたい。最後に当シンポジウムの運営をご支援下さった年会実行委員会並びに化学会事務局の皆様がこの場を借りお礼申し上げます。

（平成18年度男女共同参画委員会第7回男女共同参画シンポジウム 相馬芳枝、佐々木政子、栗原和枝）

©2007 The Chemical Society of Japan